

月刊

いじろのとも

第十四卷

十一月号

人権至上主義

麻原彰晃被告にさえ

人権が保障されていて

求刑までに

7年もかかった

しかも

弟子がやったことで

自分は知らないとい

無罪を主張している

人権！

人権！

人権！

人権至上主義よ

社会を崩壊させるなよ

エゴ追求社会の親

親のエゴ

子に押しつけて

子をだめに

する親なんと

多きことやら

人生を考え直して

みたい人は(一一八)

空海『即身成仏義』解説(一一)

(6) 4 五秘密儀軌の成仏法

また云く、

「もし毘盧遮那仏自受用身所説の内証自覚聖智の法、及び大普賢金剛の他受用身の智に依らば、即ち現生において曼荼羅阿闍梨に遇逢(あ)い、曼荼羅に入ることを得。為(いわ)く、羯磨(こんま)を具足し、普賢三摩地(ふげんさんまじ)を以て金剛を引入してその身中に入る。加持の威徳力に藉(よ)るが故に、須臾(しゆゆ)の頃(あいだ)に於いて当(まさ)に無量の三摩耶(さんまや)、無量の陀羅尼門を証すべし。不思議の法を以て、能く弟子の俱生(くしう)我執の種子を交易(へんにやく)して、時に応じて身中に一大阿僧祇劫(だいあそうぎこう)の所集の福德智慧を集得(じつとく)して、則ち仏家に生在(しうざい)すと為す。」

その人、一切如来の心より生じ、仏口(ぶつく)より生じ、仏法より生じ、法化より生じて、仏の法財を得。法財とは、謂(いわ)く三密の菩提心の教法なりと。

此れは初めて菩提心戒を授かる時、阿闍梨の加持方便に由つて得る所の益を明かす。

纒(わす)かに曼荼羅を見れば、能く須臾(しゆゆ)の頃(あいだ)に淨信す。歡喜の心を以て瞻都(せんと)するが故に、即ち阿頼耶識(あらやしき)の中に於いて金剛界の種子を種(う)う、と。

この文は、初めて曼荼羅海会の諸尊を見て得る所の益を明かす。 * は「さつた」・薩と、「土へんに垂」の文字が入ります。

今月号の現代語訳(大意)は、那須政隆著『即身成仏義の解説』(大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所刊)から、引用させて頂きます。

* * * * *
また、『金剛頂瑜伽金剛 五秘密修行念誦儀軌』(以下『五秘密儀軌』と略す)にも、このように説かれている。

もし大日如来自身が自身の内証(さと)りそのままに住し、少しの方便をも混えず、内証(さと)りそのまま

にお説きになられた法、及び、大日如来が利他のために
お説きになられた方便的智慧に依って修行するならば、
現在この生涯において、真言密教の大阿闍梨に遇って真
言の覺の境地なる曼荼羅に入住することが出来る。詳し
く謂うならば、秘密の大法を受ける前の三昧耶戒に於て、
羯磨（ここでは「こんま」と読む）という行儀作法を法
の如く完全に行ない、阿闍梨が普賢三摩地なる化他大悲
の印契を結び、「願わくはこの印契、汝弟子の身中に入
りて、無上の金剛智を成就せしめよ」と告げて弟子を加
持し、金剛 をして弟子の身中に入らしむと念ずれば、
加持の威力によって、直ちに無量の法と無量の陀羅尼門
（全一の立場）を証（さと）るのである。そのとき不思
議な法力によって、弟子の生命に即せる我執の種子（し
ゆうじ）を変化せしめ、時に応じて身中に極細妄執と称
する無明煩惱を断照し、福德を獲得する。それは即ち仏
家に生まれ出たことに外ならない。

このように阿闍梨の加持力を出発点として昇進し、仏
位に到着するのは、仏の身口意三密の活動に外ならない
ので、真言行者が即身成仏を実現するのは、つまり一切
如来の心（意密）より発生し、仏の口密より発生し、仏
法（身密）より発生し、法化（仏の教化）によって発生
するのである。まことに仏の三密は成仏のための財産で

あり、種因である。成仏のための財産（法財）というの
は、三密即ち実践修行のことであるが、その三密行こそ
菩提身（さとり）への教法なのである。

以上の所説は、真言行者が初めに菩提心戒（三昧耶
戒）を授かる時に、阿闍梨の加持方便的法力によって、
得る所の利益（りやく）を説いたものである。

次に真言行者は曼荼羅道場に引入せられるが、引入す
るや曼荼羅を拝見し、その瞬間に曼荼羅の莊嚴に心うた
れて感動し、白淨（びやくじょう）信心を發して法悦歡
喜する。そして曼荼羅をしみじみ拝み視るから、必然に
阿頼耶識（自己の根底）の中に、金剛堅固の菩提心の種
子を植えることになる。

以上の文は真言行者が初めて曼荼羅海会の諸仏諸菩
薩を拝み視て、得る所の利益を明かしたのである。

* * * * *

今回は、仏弟子が実際に修行する場合のことについて、
かなり専門的に書かれています。実際に体験する方には
大切なことのように思えます。

初めて出てきて解説がいりそうな言葉や、理論的にど
ういうことなのか、などについて少しだけ、解説してお
きたいと思います。

まず、金剛 ですが、この名は、このシリーズの第

一回目の解説（第十三巻三月号）に出てきました。十六大菩薩の一番目に、阿（あしゆく）如来の四親近（しんごん）の一人として出ています。この菩薩は、真言密教ではとても重要な菩薩で、曼荼羅の中のいろいろな箇所に出ています。（「もんがまえ」に「人」が3つ）

また、解説の第二回目（第十三巻四月号）で、サンスクリットの仏典を漢訳した「不空」や「金剛智」を、真言密教の法を伝えた「付法八祖」の一人として説明しましたが、その「付法八祖」の第二祖がこの金剛 なのです。

ここにも出てきましたように、一切の衆生はこの金剛の加持力によって発心するものとされています。ですから、大日如来の法を衆生へと伝える仲立ちをする菩薩だと言えると思います。

次に、「三昧耶戒ですが、戒をとった「三昧耶」は既に、本年（第十四巻）二月号で三昧耶曼荼羅の説明のとき、紹介しました。ご参照下さい。それは、一切の衆生を平等に救済しようとする仏の本誓のことです。

さて、「三昧耶戒」そのものですが、佐和隆研編『密教辞典』（法蔵館刊）のこの見出し項目の説明の中には次のように述べる箇所があります。

「この戒の根本は勝義・行願・三摩地の三種菩提心で

あり、その相は、1 正法を捨てず、邪行を行わない。2 菩提心を捨てない。3 一切法を相手の器に応じて惜しみなく与える。4 衆生の救済に努力する、の四つを護って四波羅夷罪（しはらいざい）を犯さない。この戒は灌頂壇に入るに先立つて必ず受けねばならない」と。

この中の言葉を少し解説しておきます。まず、勝義ですが、最高の真実という意味で、同義語として真如とか実相とかがあります。無分別智で知るもので、私の理論ですと、無意識（ずい）の自他の統合によって達成されるものです。

次に、行願ですが、身の「行い」と心の「願い」で、例えば、衆生の救済と自らの開悟を願い、そのために修行の実践をすることです。

次に、三摩地ですが、これは、既に、このシリーズ第一回の解説で述べました。ご参照下さい。

次に、菩提心ですが、悟り（菩提）を求める心、悟りを得たいと願う心です。

最後に、四波羅夷罪（しはらいざい）ですが、これは、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、の四つの戒律を犯す重罪です。不妄語については、僧侶は、自分は聖者であるとうそをつくことが、特に戒められます。多くの「教祖」がそうなっていますが。

現代語訳（大意）中に「阿頼耶識（自己の根底）の中に、金剛堅固の菩提心の種子を植えることになる」とありますが、この中の「阿頼耶識」について解説しておきたいと思います。

これは、瑜伽行派（ゆがぎょうは）の独自の概念です。同派では、人間の精神を「眼・耳・鼻・舌・身・意・末那・阿頼耶」の八つの「識」から成ると考えています。この中で、阿頼耶識は無意識の精神領域の働きであり、他は意識領域の働きであると考えています。そして、この阿頼耶識は、過去の経験を保持しつつ、身体を保持し続けながら恒常的に働いているとされています。「金剛堅固の菩提心の種子を植える」とは、そういうことなのです。

しかし、もともとは迷いの生存の根底として機能すると考えられていたのに、後に、この阿頼耶識から悟りも生じる（如来蔵）と考えられるようになり、論争が起りました。まだ、決着はついていないのではないかと思えます。私は、自己の「ずい」には、生きようとする生命力が、他己の「ずい」には、仏（如来）あるいは神が宿っているように考えています。この、二つの矛盾する働きの統合が、悟りであると考えられます。それに達するには、ひたすらな修行以外にはないと思います。

自作詩短歌等選

他者性欠如の日本

出る杭を打ち
足を引つ張る
日本の社会

生活保護が得

最低賃金が
生活保護費を
下回っているという

真に創造的な業績が
でない理由が
そこにある

ここにも

結婚して知る

働くより
生活保護を
受けた方が
得という考え方が
でてくる根拠がある

結婚し
はじめて知りし
人情の
あつき家庭の
ありしことをば

農民援助

ナイジェリアの
ある記者が
提案している

アフリカの各政府は
資金や器具を投入し
環境を整え
アフリカの農民たちが
国際競争に
立ち向かうことが
できるように
支援すべきであると

お願いだから
日本の政府にも
言ってみてくれ

女子拉致事件の頻発

女の子を拉致し
連れ回したり
監禁したりする事件が
頻発している

規範性を喪失し
自己の欲望のままに
行動する人が
増えてきたことを
示すものだ

その場しのぎの政策

政党も
哲学を欠き
政策を
提案しても
その場しのぎぞ

どろなわ式対策

少年の凶悪犯罪が
激増している

対策として
学校教育の中で
もつと
順法意識を
培うべきだという

また
善悪判断が
狂っているので
家庭では
善いことは善い
悪いことは悪いと
教えるべきだという
こうした対策を
どろなわ式という

人種差別の不満蓄積

アメリカに
いまも残りし
人種差別
不満つので
革命起こらむ

制度（構造）改革

システムを
変えてもこころ
変えなけりや
よくてせいぜい
もとのもくあみ

子どもの活字離れ

学校読書調査によると
児童生徒の活字離れが
ますます

進んでいるらしい

本も雑誌も

読まなくなつて来ている

彼らがすることは

テレビをみて

ゲームをする

ことぐらいなのだ

ますます

学力も落ち

体力も落ちて

いくことだろう

一億総低能化が

進むということか

老人は粗大ゴミか

老人世代が

意欲を燃やして

仕事をするのは

老醜なのか

過去（規範）を喪失し

情も理もなく

老人は粗大ゴミのように

廃棄処分される時代

そういう社会は

やがて

滅亡していくだろう

自作随筆選

中曾根康弘氏を巡って

毎日新聞に、毎週土曜日、「近聞遠見」と題して岩見隆夫氏が政界の裏話などを書いておられます。十月十八日は、「中曾根、宮沢は『日本の財産』と題するものでした。その中に、気になる記述がありました。まず、その部分をそのまま引用させて頂きます。

「かつて、マレーシアのマハティール首相に

『日本は戦後せっかく急成長したのに、なぜこんなに没落しかかっているのか』と問われて、

中曾根は、『それをやったのは復員軍人だよ。死んだ仲間に申しわけないと必死に結束し、ゼロから立ち上がった。2世、3世になって結束が薄れている。心と軸を作らないと・・・』と答えた。」

この記述にコメントする前に、まず、中曾根康弘氏の議員引退について触れておきたいと思います。中曾根氏は、この記事が出た後、小泉純一郎総理から衆議院の比

例代表として自民党公認の名簿に記載しない、と言いつ渡され、やむなく引退を決意されました。

私は、岩見氏が言われますように、同氏が「日本の財産」とまでは思いませんが、新聞やテレビなどでの活発な同氏の発言を聞いていますと、いま日本社会が陥っています。危機については、かなりの確に認識されているように思います（同氏がお持ちの思想やそれに基づく問題解決法はさておきますが）。少なくとも小泉氏よりは、マシだと思っております。

ところが、かつて自民党が同氏を、終生、比例代表名簿の第一位に記載すると約束していたにもかかわらず、前述のように、定年制が敷かれたという理由で、記載しないことにしたと、小泉首相が言い渡したわけです。また、小泉氏はその言い渡しに至るまでは、進退はご自分の判断に委ねるといった趣旨のことをマスコミで言っておきながらです。

これを聞いて、私は、まさに政治家も世代が変わって、全く「他己」が無くなったのだと、感じました。過去は私の時間論では他己なのですが、他己が無くなりますと、過去にした約束や発言は、刹那に消滅してしまうのです。自民党の党としての約束も、自分がしたつい最近の公での発言すらも、その時の（刻々と変わる）情勢で、今回

のように、どこかへとんで行ってしまおうのです。前述のように過去（党の規範）は存在しないも同然になるので、少し余談になりますが、過去が存在しないということとは、ご理解いただけないかも知れませんが、実は、未来（あるいは将来）も存在しないということになるので、そうなりますと、自己への執着をますます強めて、自己の「利益と選好」のみで物事が刹那的に判断されていくのです。一国の総理として、国民一人ひとりの将来の幸せを考えて行動することができなくなっていくので、中曽根氏や、派閥内の裏切りで自ら引退を表明された野中氏などは、小泉総理ほどには、他己（それは他者への情を含んでいます）を喪失していないように思えます。閑話休題。

さて、マハティール首相が、中曽根氏に対して行った「日本は戦後せっかく急成長したのに、なぜこんなに没落しかかっているのか」という質問については、それに対して中曽根氏の「それをやったのは復員軍人だよ。死んだ仲間にも申しわけないと必死に結束し、ゼロから立ち上がった」という答えは、多少は当たっている面があると思えますが、本質を突いていないように思えます。私なりの解釈を述べておきたいと思えます。

それは、一言で言いますと、日本人の「自己肥大・他

己萎縮」が一段と進行してきたからなのです。

もともと日本人は、自己肥大化が江戸時代を通じてかなり進行していました。それが、西欧列強に接し、明治維新を経て、国際化して来たのです。つまり、西欧列強がやっていたように、自国を肥大化（領土拡大）する、つまり他国を植民地化していく道です。しかし、それは、一応、第2次世界大戦の敗戦で終焉を迎えました。でも、自己肥大・他己萎縮そのものが、なくなった訳ではありません。

世界が目を見張る、戦後の経済的な発展を支えたものは、基本的にこの自己肥大・他己萎縮なのですが、それが、今日に至って、没落しかけてきたのは、なぜなのでしょう。

それは、江戸時代と明治・大正・昭和を通じて、敗戦まで庶民の間に養成されてきた勤勉・節約・孝行・愛国忠君などの儒教の精神が、戦後アメリカに押しつけられた民主主義によって徐々に失われてきたからなのです。

儒教の精神は、人々に集団への忠誠心を求め、多くの人はそれに応えて国家・社会（人々）の為に、生命を捧げました。

敗戦によって、多くの都市は廃墟と化しましたが、それを復興させ、発展させるために、「会社」という経済

的な集団に向けて人々は勤勉さや忠誠心という儒教の精神で力を結集し、必死に働きました。その経済行動を支えましたのは、他方では、民主主義・資本主義の原理である、会社ひいては自分の「利益と選好」だったのです。

こうして働いてきた結果、日本は世界に類を見ないほどの発展をしました。マレーシアのマハティール首相は大の親日家で何十回となく日本を訪れ、日本を手本としてきました。しかし、今は、日本の轍を踏まないようにと日本を反面教師にしています。こうなったのは、中曽根氏が言われるように「死んだ仲間申しわけないと必死に結束し」て働いた結果ではなく（そうした人も中には居たかも知れませんが）、もともとあつた日本人の自己肥大傾向が民主主義の自己追求的な考え方と合致したのと、儒教の教え（勤勉さと集団忠誠心）とが、車の両輪となつて、発展してきたのです。あたかも、マックス・ウェーバーが指摘しました、アメリカの発展がキリスト教精神と自由を車の両輪として来たようにです。

ところが、戦後、アメリカの政策で、日本から儒教を始めとしてあらゆる宗教を学校教育から排除させられました。そのため、終戦から時間が経過すればするほど、人々から儒教の精神は消えて行つたのです。車の両輪の片方が、だんだんと無くなって来た訳ですから、前に進

めなくなり、停滞してしまうのは当然と言えるのです。

昔と較べて、若者に勤勉さがどれほど失われているか、昔を知り、最近、若者を使ったことがある人は、身にしみてお分かりになると思います。この事情は、集団忠誠心についても同様です。

たとえば昔を知らない方でも、今フリーターやパラサイト・シングルや引きこもりの人たちがどれほど多いことか、ご存じと思います。こう呼ばれる人たちは、多かれ少なかれ労働意欲を欠きがちなのではないでしょうか。また、儒教の教えである、親への孝行の気持ちや国への愛国の気持ち、また、使用者への忠君の気持ちなども殆ど完全といえるほど失われているように思います。

そして、多くの人が、自らのエゴの追求に「きゆうきゆう」としているのです。それは、自己の欲望（性欲・食欲・優越欲）や情緒や気分の追求です。経済学の言葉でいいますと自己の「利益と選好」の追求です。

日本では、世界に類を見ないほど、人々が、今、この傾向をどんどん強めています。先に指摘しましたように、政治家も戦争を経験した世代から、それを知らない世代へと推移するにつれて、この傾向は顕著です。小泉総理は「情」がない人と評されていますが、そうした人が支持されますのは、人々に、まさに「情」がなくなつて来

ているからです。情とは、私の理論でいいますと、他己に属する「人の心を感じるころ」です。それは、人々の規範意識の根幹をなすものなのです。それが無くなるのは、人々から規範性が失われることなのです。

では、こうした現状を脱する道は、どこにあるのでしょうか。中曽根氏が「心と軸を作らないと」いけないと言われる、その「心」はどうあるべきなのでしょう。あるいは「軸」をどう形成すればいいのでしょうか。

中曽根氏は、おそらく昔の日本を想定されているのではないのでしょうか。私は、それではとても不十分だと思います。もつともつと根幹に帰って、この窮状を脱する道を想定しなければならぬように思うのです。

それは、これまで何度も言ってきましたように、軸は、私の自己・他己双対理論（その根幹は信仰）ですし、心は「人の心を感じるころ」です。人の痛みや喜びを我がものとする「こころ」です。それが、意識領域における「他己」の根幹をなすものなのです。そこから、規範意識も生まれてくるのです。

いま、「自己」しかないものですから、将来もなく、真の労働意欲も生まれません。自分の「利益と選好の追求」のみに奔走したがるのです。政治家が、日本人の象徴として、まさにそうなつてしまっているのです。

釈尊のつとば（一一一七）

法句経解説

第二章 バラモン

（三八三）バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の消滅を知って、作られざるもの（ニルヴァーナ）を知る者であれ。

なかなか難しい偈だと思います。解説して行きたいと思えます。

まず、バラモンですが、これはインド・ヴェーダ聖典に基づくカースト制の最上位の僧侶階層のことです。

テキストの中村元訳注によりますと、「原始仏教には表面的にはインド伝統のこの観念を継承したが、その意義内容を改めて、真のバラモンは祭祀（さいし）を行う人ではなくて、徳を身に具現した人のことであると主張した。この章に説かれる『バラモン』とは煩惱を去り罪悪をなさぬ人である。」とあります。

次に、「流れを断て」ですが、この流れとは、第二章のテーマだった「愛執」のことです。偈の（三三四）から（三五九）まで、取り上げられました。読みなおしてみれば幸いです。

次に、「勇敢であれ」ですが、なかなか難しいことです。現代は自己に執らわれることを「よし」とする時代ですから、勇敢になることはきわめて難しいと思えます。真に勇敢であるためには、自己への執着を捨てなければなりません。

最後に出ています「諸の現象の消滅を知って、作られざるもの（ニルヴァーナ）を知る者であれ」ですが、これこそ仏教の最終的な目標です。でも、この文章はすこし理解しにくいところがあるように思えます。

それは、「ニルヴァーナ」が分かっているならば、文意が理解でき難いように思うからです。ニルヴァーナは、涅槃、あるいは涅槃寂靜（ねはんじやくじょう）と訳されます。いわゆる解脱の境地のことです。

この境地は、絶対・無限・永遠の境地ですから、決して消滅しないものなのです。この世に存在するもの、ここでいう「諸の現象」は、必ず消滅して行きます。人類も、この地球、あるいは太陽系そのものも、いずれ消滅する運命にあります。しかし、修行の結果（こころを磨いて）到達するこの「ニルヴァーナ」の心境は、決して消滅しないのです。絶対に無限で永遠なのです。これは、体験で知る以外に知る方法はありません。一人でも多くの人が、この心境を体験されることを祈るのみです。

後記

一、今年は、とてもよく雨が降るようです。畑の池は、常に満杯になっています。

二、最近、大学の事務局から「あなたは、来年三月で定年退職することになっていますので、通知します」という文書が来ました。ご丁寧なことですなあー。

三、定年まで、あと、もう五カ月になりました。でも、私の気力や情熱は殆ど若いときと変わっていないように、自分では、思っています。いや、若いときよりなんだか、元気なようにも思えます。

四、最近、朝二時か三時に目が覚めることもかなりあるのですが、でも、若い時のように、そんなことがあっても、眠くて頭がぼーとするというようなことはありません。眼が覚めれば、早速、仕事に取りかかります。また、眠くなれば、少し眠りますが。

五、それに、私は（暗いところでは、小さな字は見えにくいので）老眼なのでしょうが、でも、有り難いことに、新聞は言うに及ばず、辞書のルビでも明るい蛍光灯の下なら、老眼鏡をかけなくても読むことができます。暗いところでルビを読むような時は、拡大鏡を使っています。

六、そして、研究の意欲もアイディアも、自分では、あまり衰えていないように、感じています。

七、なのに六十五歳になれば、自動的に定年というのは、なんだか「悪平等」のように思えます。

八、随筆でも、取り上げましたが、定年は、個性を重視する「民主主義の思想」にも反しているように思います。歳を取っても、能力も意欲も衰えない人と、若いのに、アイディアもなく、能力も意欲も衰えた人と同じに扱うのは、「悪平等」のように思いますし、また、前者のような人を定年で失うのは、社会の損失のように思えます。

九、でも、私に限れば、定年が不満だという訳ではありません。かえって、公務員の枠を外されて、自由になる気分です。まだまだ、やることが沢山ありますので。

月刊 こころのとも 第十四巻 十一月号 (通巻 一六七号)	平成十五年十一月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

